

中山西遺跡

—広島市東区中山西二丁目所在—

2017

公益財団法人広島市文化財団
特定非営利活動法人広島文化財センター

は し が き

広島市東区中山地区は、中山川に沿って開けた地域で住宅地が広がっていますが、古くは古代山陽道、現在では県道 152 号（府中祇園線）、県道 264 号（中山尾長線）や J R 芸備線といった幹線が通り、交通の要衝として栄えてきた場所でもあります。

近年、広島高速 5 号線道路建設工事中に発見された中山西遺跡では、弥生時代から古墳時代にかけての墳墓 3 基と人骨が出土し、この地域の集落での生活や社会を考察するうえで貴重な資料を得ることができました。

この報告書が一人でも多くの方に活用され、広島市域の歴史を理解する一助となれば幸いです。

最後になりましたが、この調査を行うにあたりご指導、ご助言をいただきました諸先生方、ご協力いただきました関係諸機関と関係者の皆様に、厚くお礼申しあげます。

平成 29 年（2017 年）2 月

公益財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課

例 言

1. 本書は、広島市東区中山西二丁目における高速 5 号線道路新設工事（中山 IC）に伴い、平成 28 年度に実施した中山西遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、五洋・沼田建設工事共同企業体から委託を受け、公益財団法人広島市文化財団が実施した。
3. 本書の執筆は、Ⅰを牛黄著豊、Ⅱ・Ⅲを濱岡大輔、松下真実・松下孝幸、Ⅳを高下洋一が行い、編集は牛黄著・濱岡が行った。
4. 遺構の実測・写真撮影、図面の製図は高下・牛黄著・濱岡が行った。
5. 人骨の分析は、特定非営利活動法人人類学研究機構に委託し、その成果を附論として掲載した。
6. 第 1 図は、国土地理院による 25,000 分の 1 の地形図（祇園・中深川・広島・海田市）を合成したものを使用し、第 2 図は広島市による 2,500 分の 1 の都市計画図（No.N-10）を使用した。
7. 本書に掲載した挿図の方位は、第 1・2 図は真北、その他は全て図中にて方位を示している。
8. 本書に使用した遺構の略記号は下記のとおりである。
SK：墓
9. 土層断面図及び土器の色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社発行）に拠った。
10. 本発掘調査で得られた資料は、広島市教育委員会から委託を受けて、公益財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課において保管している。

目 次

I	はじめに	1
II	位置と環境	2
III	遺構と遺物	6
	附編 広島市中山西遺跡出土の弥生～古墳人骨	11
IV	まとめ	21

挿 図 目 次

第 1 図	中山西遺跡周辺遺跡分布図	5
第 2 図	中山西遺跡周辺地形図	6
第 3 図	遺構配置図	7
第 4 図	SK1 実測図	8
第 5 図	SK2 実測図	9
第 6 図	SK3 実測図	10

図 版 目 次

図版 1	a 中山西遺跡遠景 b 中山西遺跡近景	図版 7	a SK2 蓋石検出状況 b SK2 蓋石（中段）検出状況
図版 2	a 工事中に露出した箱式石棺（SK1） b 箱式石棺（SK1）内の人骨出土状況	図版 8	a SK2 棺内完掘状況 b SK2 石棺南側小口
図版 3	a SK1 ～ 3 検出状況 b SK1 ～ 3 検出状況	図版 9	a SK2・3 蓋石検出状況 b SK3 墓壇検出状況
図版 4	a SK1 蓋石検出状況 b SK1 蓋石上粘土除去後	図版 10	a SK3 土層断面 b SK3 完掘状況 c SK1 ～ 3 完掘状況
図版 5	a SK1 蓋石除去後の棺内 b SK1 人骨検出状況 c SK1 人骨検出状況	図版 11	附論 写真図版
図版 6	a SK1 棺内完掘状況 b SK1 人骨取り上げ風景 c SK1 完掘状況		

I はじめに

広島市教育委員会（以下「教育委員会」）は、平成 25 年 9 月 12 日付で、広島市道路交通局街路課から広島高速 5 号線建設事業用地内の文化財の有無及び取扱いについて照会を受けた。教育委員会は現地踏査の結果、同年 12 月 17 日付で文化財等については無い旨回答した。

平成 28 年 3 月 19 日、高速 5 号線建設工事中の事業用地内（広島市東区中山西二丁目）から、弥生時代から古墳時代にかけての墳墓と見られる石棺とその内部から人骨の一部が発見された。広島高速道路公社（以下「広島高速」）からその旨報告を受けた広島市市民局文化スポーツ部文化振興課文化財係（以下「市文化財」という。）は、同年 3 月 22 日に現地で確認をし、3 月 23 日付で文化財保護法第 96 条の規定に基づいて、広島高速に対して当該箇所の工事の一時停止と記録保存のための発掘調査の指示を行った。

現地はすでに土取り作業が行われ島状に残された状況で、露出した石棺と人骨とともに、崩落の危険があることから、広島高速及び五洋・沼田建設工事共同企業体からの依頼を受けて公益財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課が速やかに緊急調査を実施した。あわせて、報告書を平成 29 年 1 月までに作成し、発行した。

発掘調査の関係者は以下のとおりである。

調査委託者	五洋・沼田建設工事共同企業体
調査主体	公益財団法人広島市文化財団
調査担当課	公益財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
調査関係者	堀内雅晴 理事長
	藤岡賢司 常務理事
	福永 治 常務理事
	浜中典明 常務理事
	中田英樹 常務理事
	高野和彦 文化科学部長
	菊楽 肇 文化財課長
	河村直明 文化財課主任指導主事
調査担当者	高下洋一 文化財課主任
	牛黄蓍豊 文化財課指導主事

なお、発掘調査を進めるにあたっては、広島高速道路公社、五洋・沼田建設工事共同企業体、広島市市民局文化スポーツ部文化振興課文化財係をはじめ多くの方々に多大なご配慮とご協力をいただいた。さらに、調査にあたり、本財団埋蔵文化財発掘調査指導委員会の委員である広島大学大学院文学研究科教授野島永氏、広島大学総合博物館教授藤野次史氏からは、貴重なご助言・ご指導をいただいた。また、人骨については、特定非営利活動法人人類学研究機構理事長松下孝幸氏、同事務局長松下真実氏に取り上げ、鑑定等を依頼し、玉稿を得た。ここに記して感謝の意を表したい。

Ⅱ 位置と環境

1 自然的・地理的環境

中山西遺跡は、広島湾の北東、広島市東区中山西二丁目に所在し、旧中山村に位置する。北に旧戸坂村（東区戸坂）、西に旧温品村（東区温品）、南に旧矢賀村（東区矢賀）・旧府中村（安芸郡府中町）に接している。中山地域は府中平野の北西縁にあり、中山川の細い谷を中軸としてその東西斜面に展開している。東は松笠山（標高 374.6m）から南に伸びる尾根筋があり、西には牛田山から連なる摺場山（標高 186m）、鷺巣山（標高 176m）、中迫山（標高 176m）が位置している。この東西の山に挟まれた谷に広島湾に向け南へ流れる中山川があり、松笠山の東側の温品から南へと流れる温品川（中山川と合流し府中大川となる）と合流し三角州を形成している。

本調査区は、中迫山から東へと派生した丘陵上、標高 62m 前後の西から東へと傾斜する緩傾斜地に位置している。中山川を挟んで東側、中山稻生神社のある丘陵の南裾に位置する中山貝塚が標高約 10m の位置にあり、生活に適した低地との比高差が約 50m ほど認められる。調査区のある丘陵上からは、丘陵裾を流れる中山川と温品から流れる温品川からなる三角州から南は遠く府中町までを望むことができる。中山川沿いは、府中から戸坂へと続く古代山陽道の推定地があり、南側には大永七年（1527）に大内軍が祇園銀山城の武田氏に味方する府中の白井氏を攻めるためにこの峠を越えたことに由来していると伝えられている大内越峠があり、この一帯が交通の要衝として利便性の高い地域であったと考えられる。

2 歴史的環境

中山地区では、縄文時代晩期から弥生時代中期までの多様な遺物が出土した中山貝塚（2）が発掘調査されている。かつては広島湾に注ぐ中山川・温品川が形成した沖積地の河口付近の標高約 10m の場所に位置している貝塚である。貝塚からは弥生土器・石器・骨角器・ゴホウラ製及びオオッタノハ製の貝製腕輪などが出土している。出土した遺物の中でも、出土層位にもとづいて弥生時代前期を 2 期区分した型式分類（中山Ⅰ・Ⅱ式）は、後に広島県における弥生土器研究の起点ともなる重要な成果となっている。

牛田早稲田神社遺跡（4）も縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての遺跡であるが、貝層下の円筒形の土壇から人骨が出土し、土壇墓と考えられている。土器は土壇上面の貝層から出土している。

牛田早稲田遺跡（5）は弥生時代中期末から後期末までの集落跡で、竪穴住居跡・土壇などが検出されている。西山山頂付近から南側丘陵にかけて貝塚群の存在が確認されている。西山 210m 貝塚（6）は、西山山頂から南東に下った稜線上に位置し、弥生時代後期中葉～後葉に属する土器が出土している。西山 261m 貝塚（7）は山頂部に位置するが、詳細は明らかではない。西山

258m 貝塚（8）は、西山頂上から西へ延びる稜線に位置する遺跡である。1964 年に巴型銅器が採集されたことを契機に、翌 65 年広島大学考古学研究室が発掘調査を行い、弥生時代後期終末の土器や銅鏃・鉄鏃・骨鏃・鉈・鉄斧・石斧・石錘・丁字頭土製勾玉・分銅形土製品が出土し、その後 1972 年の調査の際には、竪穴式住居 1 軒が検出された。軍事的性格が濃い遺物が多く出土したことから、軍事目的で営まれた「高地性集落」の可能性が指摘されている。茶磨山南貝塚（9）は、西山から延びる尾根上標高 220m 付近に位置する。弥生時代後期のものと考えられるが、遺跡の規模・時期などについての詳細は明らかではない。

古墳時代については、古墳以外の遺構は確認されておらず、調査が行われたものを中心に述べていく。

桜ヶ丘古墳（12）は、長尾古墳群と同一の尾根の西側斜面に位置している箱式石棺で、工事中の市道部分の地表下約 3m で発見された。石棺のみの調査であったため墳丘等の外部施設は不明である。箱式石棺は長さ 1.85m、幅 0.6m で棺底は板状の石材を敷きつめており、棺内からは人骨が出土している。近隣の禅昌寺西遺跡 A 主体部の箱式石棺と類似していることから、同時期と推定されている。

長尾古墳群（13）は全部で 5 基の古墳からなる古墳群で、その内、前方後円墳 1 基と円墳 3 基が市指定史跡に指定されている。第 1 号古墳は墳長約 42m、後円部径約 24m、高さ約 4.5m、前方部長さ約 18m、幅 16m の前方後円墳で、後円部は 3 段、前方部は 2 段の段築成が確認された。後円部頂部からは 2 基の箱式石棺が検出されている。太田川最下流域では最も大きな古墳で 4 世紀末から 5 世紀初頭頃と推定されている。第 2 号古墳は直径約 25m の円墳、第 3 号古墳は直径約 13m の円墳で、共に埋葬主体部は確認されていないが、周溝等からの出土遺物により 5 世紀初頭から前半にかけての時期と推定されている。

田原ヶ城山古墳（18）は、標高約 115m の尾根上に位置している、箱式石棺を内部主体にもつ、直径約 10m の円墳と考えられている。石棺は攪乱にあっており、棺材が散乱した状態であったが、蓋石の内面には赤色顔料が塗布されていたことが確認されている。

須賀谷第 1 号古墳（27）は、墳丘の規模や形は不明だが埋葬主体部として長さ 1.6m、幅・深さ 0.25m の箱式石棺が検出されており、仿製鏡（八乳鏡・六獣鏡）・銅釧・勾玉・管玉・算盤玉・ガラス小玉・鉄剣・鉄刀・鏃など豊富な副葬品が出土している。時期は 5 世紀後半頃と考えられている。

上岡田古墳（29）は、道隆寺の北西 40m の所に位置する古墳で、南側に開口する横穴式石室を埋葬主体部としている。石室は奥壁に近い部分を残すのみで、規模は現存長さ 2m、幅 1.5m、高さ 1.5m である。墳丘盛土の大部分は流失しており墳形は不明である。石室内から金環、鉄刀、須恵器（坏・甕・平瓶）、土師器などが出土している。

古代、中山地区は府中・温品とともに安芸郡に属していたと考えられている。中山地区では古代山陽道が通っており、府中町の下岡田遺跡（32）の西を北へと進み中山川に沿って中山峠を越えて戸坂へと続いている。下岡田遺跡は、標高 10m ほどの丘陵先端に地方官衙を想定される建物跡群が検出されている。東西 3 間・南北 6 間のこの遺跡の中心的建物付近からは重圈文の軒丸瓦、

重弧文の軒平瓦，均整唐草文の軒平瓦が多数出土しており，この建物が瓦葺きであったと考えられ，安芸駅館跡と推測されている。

鎌倉時代，この地域は東寺の荘園となっていたが，後半頃になると守護勢力の支配が進み，安芸国守護武田氏の領域になる。本地域には，多くの山城が確認されており，出張城跡（A）・石井城跡（B）・鶴江山城跡（C）・多々万比城跡（D）・鏡山城跡（E）・田原城跡（F）・戸坂城跡（G）・戸坂支城跡（H）など主要交通路である古代山陽道を望める位置に0.5～2 km間隔で城が配されている。

山城では唯一，鏡山城跡で発掘調査が実施されており，狭い調査範囲の中で3段の平坦面を確認されている。遺物は出土していない。

中山地域では，これまでに中山貝塚や鏡山城跡しか発掘調査された遺跡がなく，今回の調査で新たな遺跡を確認することができ，遺跡の分布を考える上でも貴重な資料となった。

引用・参考文献

桐谷優 1998『鏡山城跡』山武考古学研究所

梶木敬太 1999『長尾遺跡—広島市東区戸坂所在—』財団法人広島市文化財団発掘調査報告書第5集

（財）広島市歴史科学教育事業団編 1992『古路・古道調査報告』広島市の文化財第50集

禅昌寺西遺跡発掘調査団編 1980『広島市戸坂町 禅昌寺西遺跡発掘調査報告』

府中町史編さん専門委員会編 1977『安芸府中町史』2 資料編

広島県編 1979『広島県史』考古編

広島市（広島市公文書館）編 1991『中山村史』

広島市（広島市公文書館）編 1991『戸坂村史』

広島市教育委員会生涯学習部文化財担当編 2001『広島市東区戸坂出江所在 長尾古墳群発掘調査報告』

若島一則・篠原達也 1994『牛田早稲田遺跡発掘調査報告』（財）広島市歴史科学教育事業団調査報告書第13集



1. 中山西遺跡 2. 中山貝塚 3. 中山南遺跡 4. 牛田早稲田神社遺跡 5. 牛田早稲田神社遺跡
6. 西山210m貝塚 7. 西山261m貝塚 8. 西山258m貝塚 9. 茶磨山南貝塚 10. 茶磨山西古墳
11. 宮の山古墳 12. 桜ヶ丘古墳 13. 長尾第1～5号古墳 14. 長尾遺跡 15. 龍泉寺古墳 16. 八幡山古墳
17. 浄厳寺遺跡 18. 田原ヶ城山古墳 19. 蛇拔A地点遺跡 20. 蛇拔B地点遺跡 21. 大原貝塚 22. 横見遺跡
23. 森垣内2号貝塚 24. 温品中学校貝塚 25. 森垣内1号貝塚 26. 矢田貝塚 27. 須賀谷第1・2号古墳
28. 赤羽古墳 29. 上岡田古墳 30. 道隆寺跡 31. 大窪谷遺跡 32. 下岡田遺跡 33. 城山貝塚群
34. 石井城貝塚 35. 長福寺南門貝塚 36. 市貝塚 37. 沖貝塚
- A. 出張城跡 B. 石井城跡 C. 鶴江山城跡 D. 多々万比城跡 E. 鏡山城跡 F. 田原城跡 G. 戸坂城跡
- H. 戸坂支城跡 I. 田原城跡2 J. 永町山城跡 K. 屋太山城跡 L. 串山城跡

第1図 中山西遺跡周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

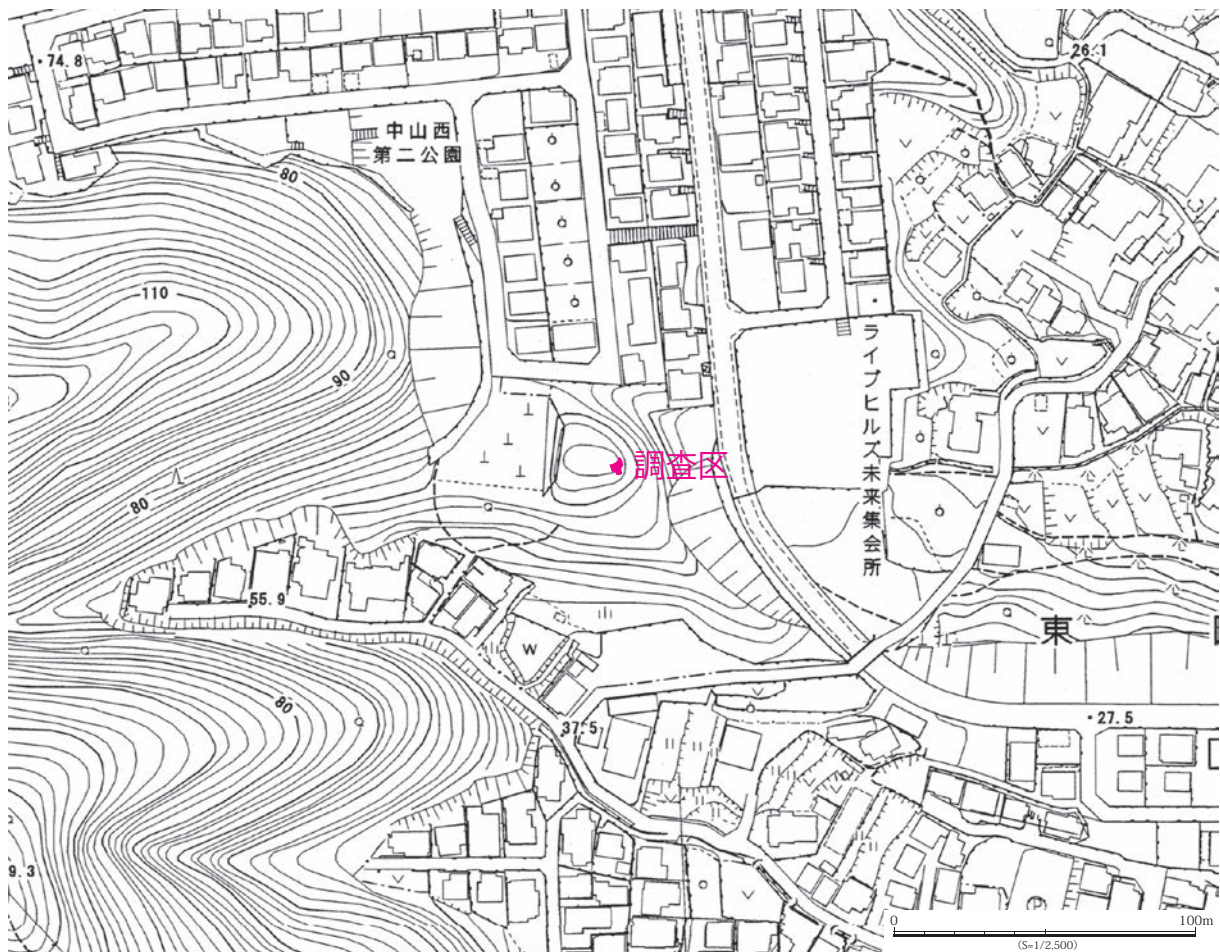
Ⅲ 遺構と遺物

1 調査の概要

本遺跡は、広島高速5号線建設工事中に発見された丘陵上に位置する遺跡である。そのため、検出された石棺を含めた約35㎡が旧地形を残している箇所、それ以外はすでに重機により大きく削平された状態であった。工事により検出された箱式石棺は南側部分が損壊しており、残存している石棺内には人骨が良好な状態で残存していた。

調査にあたっては、工事中に検出された石棺と旧地形が残る石棺北側部分、表土・包含層除去、遺構検出・遺構の掘り下げ等を人力で行った。本遺跡が位置する丘陵は、地盤が風化した花崗岩（地山）で形成されており、遺構はこの地山を掘り込んで造られていた。

調査の結果、工事中に発見された石棺の他に、石棺の約0.9m北側から小型の箱式石棺墓と石蓋土壌墓を検出した。いずれの墓も、西から東へと傾斜する丘陵斜面に対し主軸を直交するように配されていた。検出した順に、人骨のある箱式石棺墓をSK1、小型の箱式石棺墓をSK2、石蓋土壌墓をSK3とした。遺物はSK1の人骨以外に出土しなかった。人骨の取り上げについては特定非営利活動法人人類学研究機構に依頼し、人骨の鑑定も実施した。



第2図 中山西遺跡周辺地形図 (S=1/2,500)

2 遺構

SK1（箱式石棺墓）

SK1は、調査区の南端に位置し、工事中に発見された箱式石棺墓である。石棺の南側部分が損壊した状態であった。損壊した部分から石棺の断面を観察すると、棺身と蓋石の隙間に灰色の粘土質の土によって丁寧に目貼りが施されており、そのため石棺内部に土が流入することなく、調査前から骨盤や大腿骨等の人骨が確認することができるほど良好な状態であった。

墓壇は、残存部分で南北 1.7 m、東西 1.31 mで平面形態は不整形な長方形を呈している。主軸は N19° E である。西側の深さが 86cm、東側の深さが 34cm で、山側部分はかなり深く掘り込んでいる。墓壇底面は、南北 1.26m、東西 0.66m で石棺石材の据え付け部分のみ部分的に掘られている。

石棺は蓋石が 4 石、西側の側壁は 3 石、東側の側壁は 4 石、北側の小口は 1 石で構成さ

れており、棺身は側壁を小口壁で塞ぐ形となっていることから、小口壁を基準に側壁が据えられたと考えられる。蓋石には 60 ～ 90cm ほどの様々な形をした大型の石材、棺身には 50 ～ 60cm の板状の石材が使われている。蓋石はそれぞれが接することなく棺上に置かれていたため、設置順序は不明である。石棺の内寸は、幅 30 ～ 38cm、長さ 1.36m（東側壁）、1.26m（西側壁）、高さ 27 ～ 30cm である。床面の標高は 61.4m で、地山を平坦に整形した状態である。

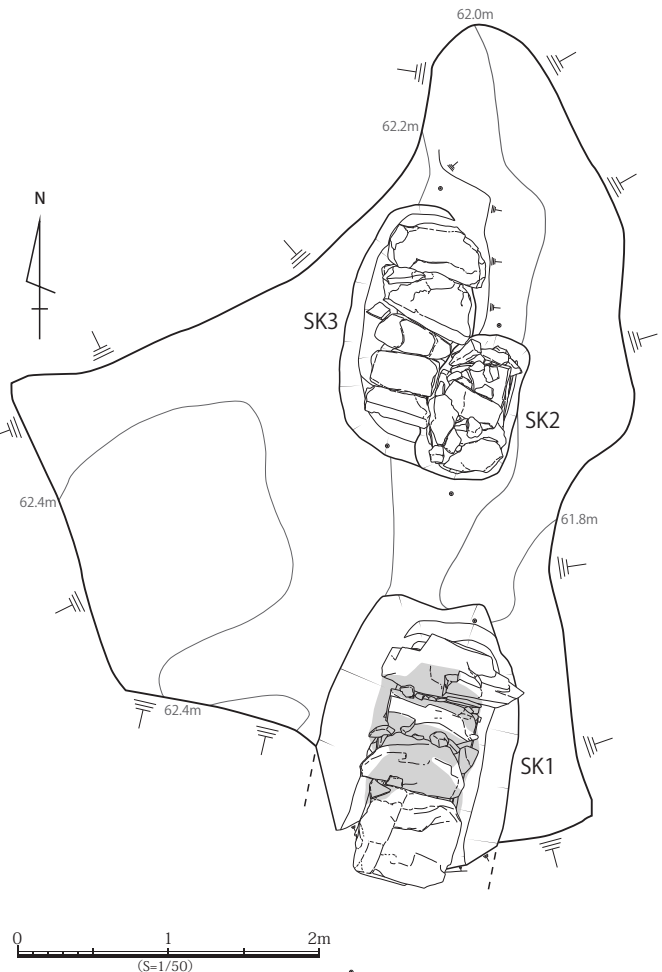
出土した人骨は、胸骨体、腰椎、肋骨の一部、仙骨、左右の寛骨、左側膝蓋骨のごく一部、左右の大腿骨と脛骨が遺存していた。骨の位置関係から埋葬姿勢は仰臥で、頭位方向は南である。被葬者は女性で、身長は約 151cm と推定されている。

被葬者の身長から、損壊した石棺の復元を試みると、棺底の内寸の長さが約 1.8 ～ 2m になり、北側・南側ともに側壁が 1 石分が無くなっていたことが分かる。小口壁と蓋石を含めると少なくとも 5 石の石材が工事に伴い損壊したことになる。

棺内からは、人骨以外には何も遺物は出土しなかった。

SK2（箱式石棺墓）

SK2は、SK1の0.9m北側に位置する小型の箱式石棺墓である。墓壇は南北1m、東西0.6m、



第3図 遺構配置図 (S=1/50)

石棺は小口壁、側壁それぞれ1石で構成されている。東側の側壁が長く、西側の側壁の長さと釣り合わないため、北側の小口石を斜めに据えることにより箱形としている。石材の組合せ方は、SK1と同様に側壁を小口壁で塞ぐ形としている。蓋石は基本的には30～40cm大の板状の石材2石からなり、北側から順に置いている。蓋石の隙間を埋めるために、小さな板状の石材をいくつも重ねて置いており、SK1のように石材の間を粘土で目貼りはされていない。南側の大きな蓋



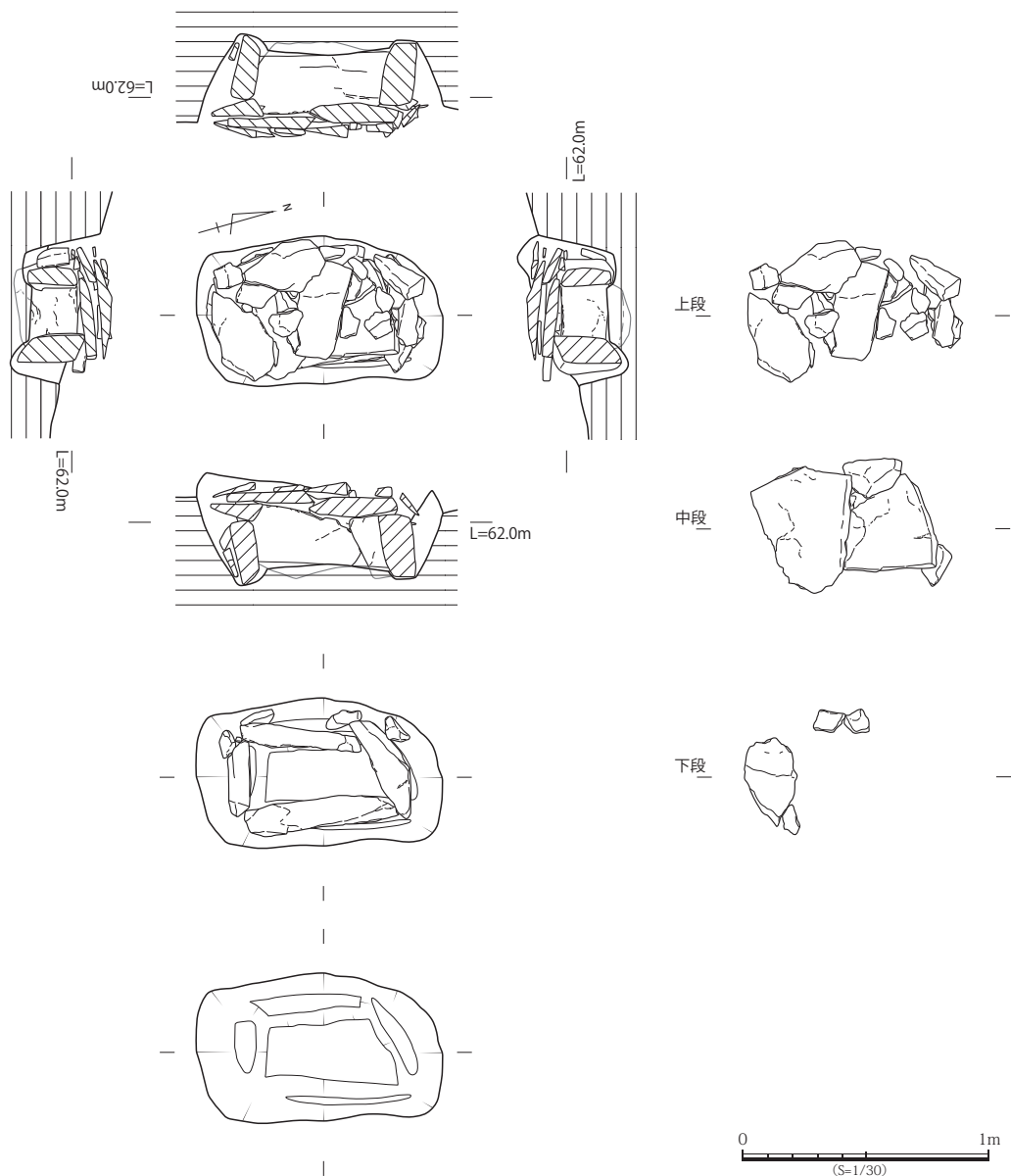
石の下には小口壁と蓋石との隙間を埋めるために、幅 36cm、厚さ 4 cm の板状の石材を置いており、一見、小口壁が 2 石で構成されているかのように見える。また、蓋石の北西部分は S K 3 が作られた際に部分的に動かされており、北側（S K 3 の方）へ斜めに沈み込んでいた。このような影響を受けたためか、石棺内にはほぼ蓋石直下まで土が流入している状態であった。

石棺の内寸は、長さ 50cm、幅は南小口で 26cm、北小口で 18 cm、深さが南小口で 26cm、北小口で 22 cm で、南小口側が幅、深さ共に広がっている。床面の標高は 61.8m で、地山を平坦に整形した状態である。

棺内を精査したが人骨等は遺存しておらず、遺物も出土しなかった。棺の幅や深さの差から、被葬者の埋葬頭位方向は南側と推測され、石棺の大きさから、乳幼児が埋葬されていたと想定される。

S K 3（石蓋土墳墓）

S K 3 は S K 2 の西側にほぼ平行するように作られた石蓋土墳墓で、S K 2 の墓壇の北西部分を一部削平していた。墓壇は 2 段掘りとなっており、1 段下がった面に石蓋が置かれていた。墓壇の

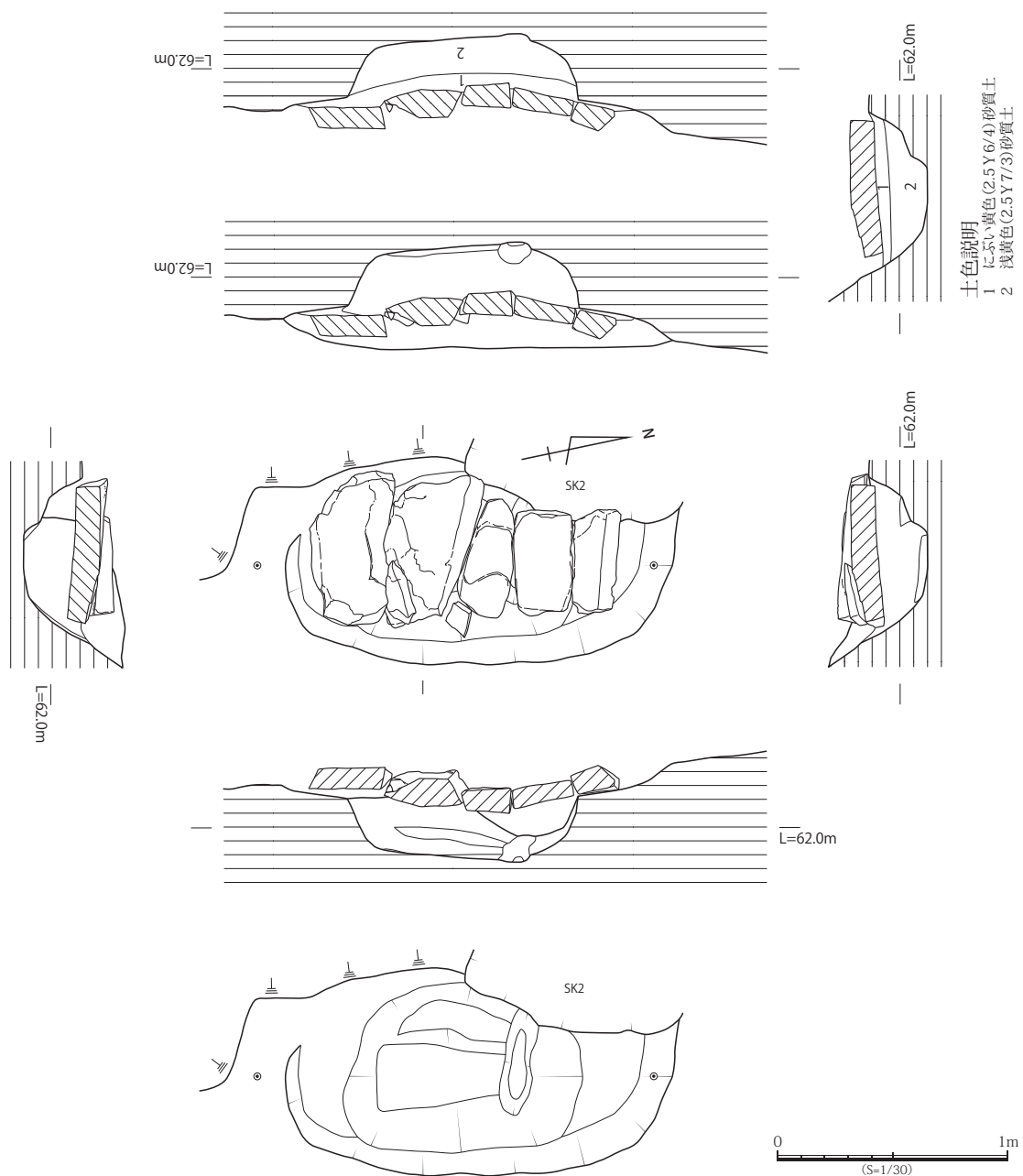


第 5 図 SK2 実測図 (S=1/30)

上段の大きさは南北 1.68m，東西約 90cm，深さ 16 cm，下段の大きさは南北 1 m，東西 72cm，深さ 24 cm で，平面形態は隅丸長方形を呈している。主軸は N11° E である。

蓋石には，南側の 2 枚に幅 60cm 大の石材を，残りの 3 つには幅 40 ～ 50cm 大の石材を用いており，北側から順に置かれていた。蓋石の石材と石材の間には，S K 1 のように小石を詰めたり，粘質土を用いた目貼りなどはなかった。蓋石の下は素掘りの土壌である。床面の内寸は，長さ 52cm，南小口幅 29cm，北小口幅 18 cm，深さは南小口側で 24 cm，北小口側で 22 cm である。床面の北小口側に，長さ 46cm，幅 14cm，深さ 4 cm の落込みがあり，木棺材が据えられていた可能性がある。

墓壇の幅の差から，被葬者の埋葬頭位方向は南側と推測される。また，墓壇の大きさから被葬者は乳幼児と考えられる。



第 6 図 SK3 実測図 (S=1/30)

附論 広島市中山西遺跡出土の弥生～古墳人骨

松下真実*・松下孝幸**

【キーワード】：広島県，弥生～古墳人骨，石棺墓，女性，高身長

はじめに

広島県広島市東区中山西2丁目に所在する中山西遺跡は2016（平成28）年3月に都市高速道路建設中に発見された遺跡で，箱式石棺墓2基，石蓋土壙墓1基からなる埋葬跡である。同年4月に発掘調査がおこなわれ，箱式石棺墓1基（SK-1）から人骨が検出された。この石棺は工事中に重機によって南側小口付近が破壊されたが，箱式石棺の大部分は原形を留めていた。しかし，人骨は上部腰椎から上が失われてしまっていた。残念ながら付近から頭蓋や上肢骨などは発見することができなかった。2基の箱式石棺墓のうち1基は小児用石棺で，この石棺と石蓋土壙墓には人骨は残存していなかった。丘陵のほぼ頂部で，南から人骨が残存していた成人用石棺墓，小児用石棺墓，石蓋土壙墓が，長軸を南北にそろえて並んで検出された。石蓋土壙墓と小児用石棺には切り合いが認められ，前者が後者よりも後に築墓されている。3基の遺構からは副葬品がまったく検出されなかったため，所属時期を狭い範囲内で特定することはできなかったが，これまでの広島県における考古学的成果から，弥生時代後期から古墳時代前半期に築造されたと推測されている。

広島県内で，これまで筆者らが報告した弥生人骨は，広島市の佐久良遺跡（松下，1984a），末光遺跡群B地点（松下，1984b），梨ヶ谷遺跡B地点（松下，1998a），琴平遺跡（松下・他，2011b），丸子山墳墓群（松下，2010），坊主山墳墓群（松下・他，2011a），北広島町（旧千代田町）の壬生西谷遺跡（松下・他，1989），須倉城遺跡（松下，1998b），府中市の打堀山遺跡（松下，1997b），山の神遺跡群（松下，1998d），池ノ迫遺跡群（松下，1998d），世羅町の矢の迫遺跡（松下，1997a），福山市（旧神辺町）の池之坊墳墓群（松下，2004b）から出土した例がある。

また，弥生時代から古墳時代にかけての人骨は，北広島町（旧千代田町）の歳ノ神遺跡群（松下・他，1986a），中出勝負峠墳墓群（松下・他，1986b），竹原市の鷺の森遺跡（松下・他，1991a），東広島市の胡麻4号遺跡（松下・他，1990a），旧豊栄町の手島山墳墓群（松下・他，1991b），府中市の門田A遺跡（松下，1999），福山市の法成寺サコ遺跡（松下，1998c）から出土している。

弥生人骨のうち保存状態が良好で形質の特徴が明らかになったものは，壬生西谷遺跡，佐久良遺跡，歳ノ神遺跡群，中出勝負峠墳墓群から出土した人骨程度なので，広島県全域で弥生人の特徴を把握し，考察できるまでには至っていない。古墳人に関しては北広島町（旧千代田町），東広島市，府中市での特徴が次第に明らかになりつつある。また，2009年には丸子山墳墓群から出土した人骨の一部が発見され，その特徴を明らかにすることができた（松下真実，2010）。研究ができたのは2個の頭蓋であるが，1体はかなりの高顔で，これほどまでに顔が高いものは北部九州の甕棺から出土する弥生人骨の中でもそう多くはない。これほどの高顔の弥生人骨が広島市内から出土した意義はかなり大きく，今後その出自を明らかにしていく必要がある。この墳墓群からはイモガイ製腕輪や小札状製品も発見されており，副葬品と人骨形質との関連が注目される。

今回出土した人骨の保存状態は必ずしも良好なものではないが、四肢骨は人類学的観察や計測をおこなうことができたので、その結果を報告しておきたい。

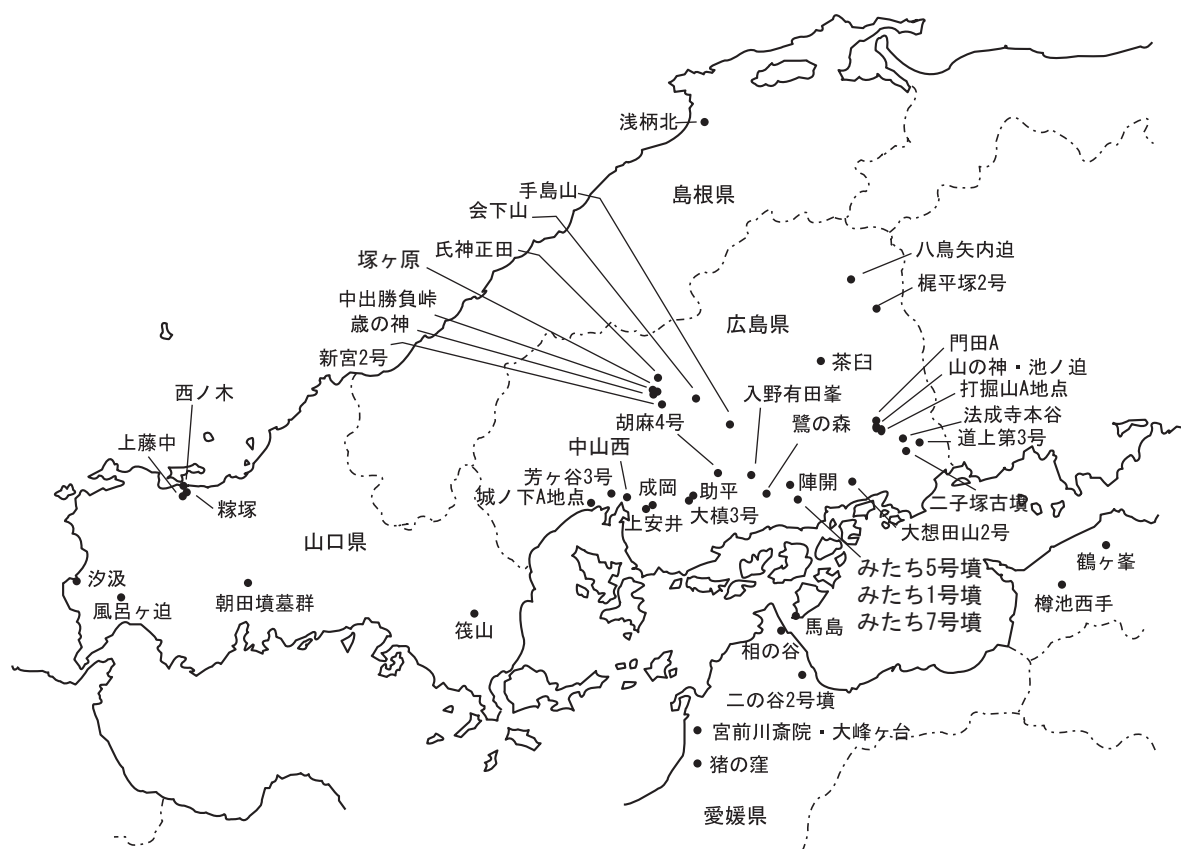


図1 遺跡の位置
(Fig.1 Location of the Nakayama-nishi site, Hiroshima City, Hiroshima Prefecture)

資 料

1 基の箱式石棺墓（SK-1）から 1 体の人骨が出土した（表 1）。この 1 体の人骨は後述しているとおり年齢不明の女性骨である（表 2）。埋葬姿勢は仰臥で、頭位は南である。膝関節は伸展していたが、上肢骨が残存していなかったため、肘関節の様態は不明である。

残存していたのは、胸骨体、腰椎、肋骨の一部、仙骨、左右の寛骨、左側膝蓋骨のごく一部、左右の大腿骨と脛骨である。腓骨は残存していなかった。肘関節の様態は不明であるが、膝関節は伸展状態である。右側大腿骨は外側に回旋（外旋）し、内側面が上を向いた状態で、また右側脛骨は裏面が上を向いた状態で検出された。このような様態は明らかに不自然であるが、盗掘を受けた様子は認められない。石棺の一部が破壊された際に右側下肢骨が動かされ、脛骨の裏面が上を向いてしまったのかもしれないが、確証はない。

骨質はもろく、スカスカの状態、かろうじて残存していたという状態である。大腿骨体は骨体の中央部などで一部を欠損しているが、この部分は石棺側石のつなぎ目と一致していることから、石材の継ぎ目から雨水が石棺内に流入し、骨質を破壊したものと思われる。

頭蓋が残存しておらず縫合の観察ができなかったため年齢を推定することができなかったが、腰椎体に骨棘が認められるので、年齢は若くはなかったようである。参考までに年齢区分を表 3 に示した。

表 1 資料数 (Table 1. Number of materials)

成 人			幼小児	合 計
男性	女性	不明		
0	1	0	0	1

表 2 出土人骨一覧 (Table 2. List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	備考（頭位、埋葬姿勢、推定身長値）
SK-1	女性	不明	南頭位、仰臥、膝関節伸展、151.62cm

表 3 年齢区分 (Table 3. Division of age)

年齢区分		年 齢
未成人	乳児	1 歳未満
	幼児	1 歳～ 5 歳 （第一大臼歯萌出直前まで）
	小児	6 歳～ 15 歳 （第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで）
	成年	16 歳～ 20 歳 （蝶後頭軟骨結合癒合まで）
成人	壮年	21 歳～ 39 歳 （40 歳未満）
	熟年	40 歳～ 59 歳 （60 歳未満）
	老年	60 歳以上

注）成年という用語については土井ヶ浜遺跡第 14 次発掘調査報告書（1996）を参照されたい。

この人骨は、考古学的所見より、弥生時代後期から古墳時代前半期に属する人骨と推測される。計測方法は、Martin-Saller（1957）によったが、脛骨の横径はオリビエの方法で計測した。

所 見

各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

S K - 1（女性・年齢不明）

上肢は工事中の重機掘削により残存していない。残存していたのは胸骨体、肋骨、腰椎、仙骨、寛骨、大腿骨、脛骨である。

1. 下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨が残存していた。保存状態は悪い。

①寛骨

両側の恥骨体、坐骨体と腸骨の一部が残存していた。比較的には保存状態は良好である。大坐骨切痕が一部確認できた。大坐骨切痕の角度は大きい。また、耳状面前溝は認められない。

②大腿骨

両側の骨体が残存していたが、保存状態は極めて悪い。骨体にはクレーター状の表面剥離が認められる。骨体はやや太く、粗線や骨体両側面の後方への発達が悪い。

計測値は、骨体中央周は 79mm（左）で、骨体はやや太い。骨体中央矢状径は 23mm（左）、中央横径が 26mm（左）で、骨体中央断面示数は 88.46（左）となり、粗線や骨体両側面の後方への発達は極めて悪い。

③脛骨

両側の骨体が残存していた。保存状態は悪い。骨体は細く扁平である。骨間縁の発達は弱い。骨体の断面形はヘリチカのV型を呈している。

計測値は、骨体周が 69mm（左）で、骨体は細い。中央最大径は 26mm（左）、中央横径は 17mm（左）で、中央断面示数は 65.38（左）となり、骨体は扁平である。

2. 胴の骨

①腰椎

腰椎が残存していた。第 5 腰椎の椎体の左側下縁には棘状の骨増殖が認められる。

②仙骨

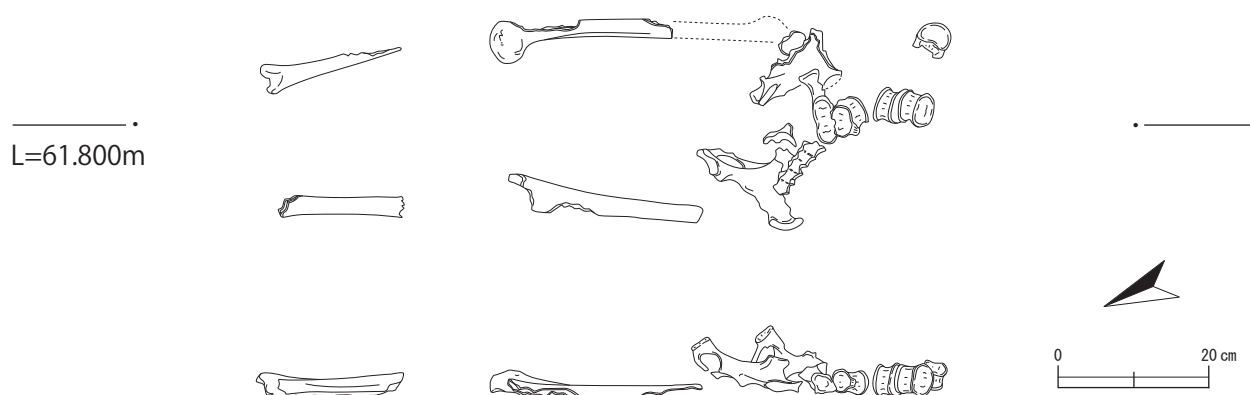
第 1 仙椎のみが残存していた。仙骨底上縁には棘状の骨増殖が認められる。

3. 推定身長

現場で右大腿骨の最大長を推定することができた。最大長は 405mm で、推定身長は 151.62cm（Pearson）、151.76cm（藤井）となり、身長は高い。

4. 性別・年齢

性別は、大坐骨切痕の角度が広く、下肢骨が細いので女性と推定した。年齢は不明であるが、第5腰椎下縁と仙骨底縁に棘状の骨増殖が認められることから、それほど若くなさそうである。



考 察

広島県および周辺地域から出土している弥生人骨、古墳人骨と比較してみた。

1. 大腿骨

表4は大腿骨の比較表である。中央周は79mm(左)で、表4では梨ヶ谷と同値で、門田A(78mm)とも大差なく、末光(73mm)、鷺の森(74mm)よりは大きい、北部九州や西北九州弥生人よりも小さい。

骨体中央断面示数は88.46で、表4では最小値となり、粗線や骨体両側面の後方への発達極めて悪い。

2. 脛骨

表5は脛骨の比較表である。骨体周は69mmで、表5では最小値となり、骨体は細い。中央断面示数は65.38で、表5では最小値となり、他の弥生人よりも骨体は扁平である。

要 約

2016(平成28)年3月、都市高速道路建設中に広島県広島市東区中山西2丁目で箱式石棺墓2基、石蓋土壙墓1基が発見され、箱式石棺墓1基(SK-1)から人骨が検出された(中山西遺跡)。石棺の一部は破壊され、上半身の人骨は失われていたが、四肢骨はかろうじて埋葬状態を保っており、計測や観察をおこない。以下の結果を得た。

1. 1基の箱式石棺墓(SK-1)から年齢不明の女性骨が1体出土した。
2. この人骨は、考古学的所見から、弥生時代後期から古墳時代前半期に属する人骨と推測されている。
3. 大腿骨は、中央周は79mm(左)でやや太いが、骨体中央断面示数は88.46(左)で、粗線や骨体両側面の後方への発達は極めて悪い。
4. 脛骨の骨体周は69mm(左)で著しく細く、中央断面示数は65.38(左)で、骨体は扁平である。
5. 腰椎体には骨棘が形成されており、変形性脊椎症が認められる。

6. 現場で推定した右大腿骨最大長 405mm から算出した推定身長は 151.62cm (Pearson), 151.76cm (藤井) となり, 高身長である。
7. 本例は, 頭蓋が遺存していなかったもので頭型や顔面の特徴を明らかにすることはできなかった。大腿骨は太いが, 骨体両側面の後方への発達が悪く, 大腿部の筋の発達はよくなかったようであるが, 脛骨は細いものの, 骨体がやや扁平であることから, 下腿の深層の屈筋は比較的発達していたようである。

謝辞

《擱筆するにあたり, 本研究と発表の機会を与えていただいた財団法人広島市文化財団の皆様感謝致します。》

《参考文献》

1. 松下孝幸 1984a: 広島市佐久良遺跡出土の弥生時代人骨 広島市安佐北区白木町所在佐久良遺跡発掘調査報告 (広島市の文化財第 27 集): 25-46.
2. 松下孝幸 1984b: 広島市末光遺跡群 B 地点出土の弥生時代人骨 広島市安佐北区高陽町所在末光遺跡群発掘調査報告 (広島市の文化財第 28 集): 90-95.
3. 松下孝幸・他 1986a: 歳ノ神遺跡群出土の弥生・古墳時代人骨 歳ノ神遺跡群・中出勝負峠墳墓群 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 49 集): 201-212.
4. 松下孝幸・他 1986b: 中出勝負峠墳墓群出土の弥生・古墳時代人骨 歳ノ神遺跡群・中出勝負峠墳墓群 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 49 集): 213-244.
5. 松下孝幸・他 1989: 広島県千代田町壬生西谷遺跡出土の弥生時代人骨 壬生西谷遺跡 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 75 集): 63-80.
6. 松下孝幸・他 1990a: 東広島市胡麻 2 号古墳・胡麻 4 号遺跡出土の人骨 東広島市ニュータウン遺跡群 I: 341-357.
7. 松下孝幸 1990b: 広島県の古人骨 みよし風土記の丘 No. 40: 1-4. みよし風土記の丘友の会.
8. 松下孝幸・他 1991a: 広島県竹原市鷺の森遺跡出土の弥生～古墳時代人骨 鷺の森遺跡発掘調査報告 (付編): 1-40.
9. 松下孝幸・他 1991b: 広島県豊栄町手島山墳墓群出土の弥生～古墳時代人骨 手島山墳墓群 (広島県埋蔵文化財センター文化財発掘調査報告第 93 集): 61-80.
10. 松下孝幸 1997a: 広島県世羅町矢ノ迫遺跡出土の人骨 矢の迫遺跡: 11-20.
11. 松下孝幸 1997b: 広島県府中市打堀山遺跡 A 地点出土の弥生・古墳時代人骨 打堀山遺跡 A・B 地点 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 147 集): 47-50.
12. 松下孝幸 1998a: 広島市梨ヶ谷遺跡 B 地点出土の弥生時代人骨 梨ヶ谷遺跡発掘調査報告 (財団法人広島市歴史科学教育事業団調査報告書第 22 集): 105-113.
13. 松下孝幸 1998b: 広島県千代田町須倉城遺跡出土の弥生時代人骨 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 161 集: 75-84.
14. 松下孝幸 1998c: 広島県福山市法成寺サコ遺跡・法成寺本谷古墳出土の弥生・古墳人骨 法成寺サコ遺跡・法成寺本谷古墳 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 166 集): 52-58.
15. 松下孝幸 1998d: 広島県府中市山の神・池ノ迫遺跡群出土の弥生・古墳時代人骨 山の神・池ノ迫遺跡群 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 165 集): 75-105.
16. 松下孝幸 1999: 広島県府中市門田 A 遺跡・東横山第 1 号古墳南斜面出土の人骨 門田 A 遺跡・東横山第 1・4 号古墳 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 183 集): 103-112.
17. 松下孝幸 2004a: 広島県神辺町門前 2 号遺跡・道上第 3 号古墳出土の弥生・古墳人骨 道上第 2・3・5 号古墳・門前 2 号遺跡 (財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第 6 集): 113-119.

18. 松下孝幸 2004b：広島県神辺町池之坊墳墓群出土の弥生人骨 神辺町内遺跡発掘調査概要 2002 年度 (神辺町埋蔵文化財調査報告第 27 集)：28-38.
19. 松下孝幸・他 2011a：広島市坊主山遺跡出土の弥生人骨 トンガ坊城遺跡出土・坊主山遺跡・柳遺跡・琴平遺跡 ((財)広島市未来都市創造財団発掘調査報告書第 1 集)：301-311.
20. 松下孝幸・他 2011b：広島市琴平遺跡出土の弥生人骨 トンガ坊城遺跡出土・坊主山遺跡・柳遺跡・琴平遺跡 ((財)広島市未来都市創造財団発掘調査報告書第 1 集)：316-319.
21. 松下真実・他 2010：広島市丸子山墳墓群出土の弥生人骨 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要第 5 号：33-43.

* Masami MATSUSHITA、** Takayuki MATSUSHITA

The Organization of Anthropological Research [特定非営利活動法人・人類学研究機構]

表4 大腿骨計測値(女性、右、mm)(Table 4. Comparison of measurements and indices of female right femora)

	中山西		鷺の森		梨ヶ谷		末光		門田A		土井ヶ浜		横隈狐塚		金隈		大友	
	弥生～古墳人 広島県 広島市 (松下・他)	SK-1	弥生～古墳人 広島県 竹原市 (松下)	M	2号C主体 (松下)	弥生人 広島県 広島市 (松下)	弥生人 広島県 広島市 (松下)	弥生人 広島県 広島市 (松下)	弥生～古墳人 広島県 府中市 (松下)	n	M	n	M	n	M	n	M	
6.	骨体中央矢状径	23 (左)	23	23	24(左)	23	23	23	1 23	64	25.50	20	25.95	29	26.5	30	26.00	
7.	骨体中央横径	26 (左)	23	23	25(左)	24	24	24	1 25	64	25.45	20	25.10	29	25.4	30	25.03	
8.	骨体中央周	79 (左)	74	74	79(左)	73	73	73	1 78	64	80.14	20	80.00	29	80.7	28	80.32	
6/7	骨体中央断面示数	88.46 (左)	100	100	96.00 (左)	95.83	95.83	95.83	1 92.00	65	100.31	20	103.64	29	104.8	30	104.05	

表5 脛骨(女性、右、mm)(Table 5. Comparison of measurements and indices of female right tibiae)

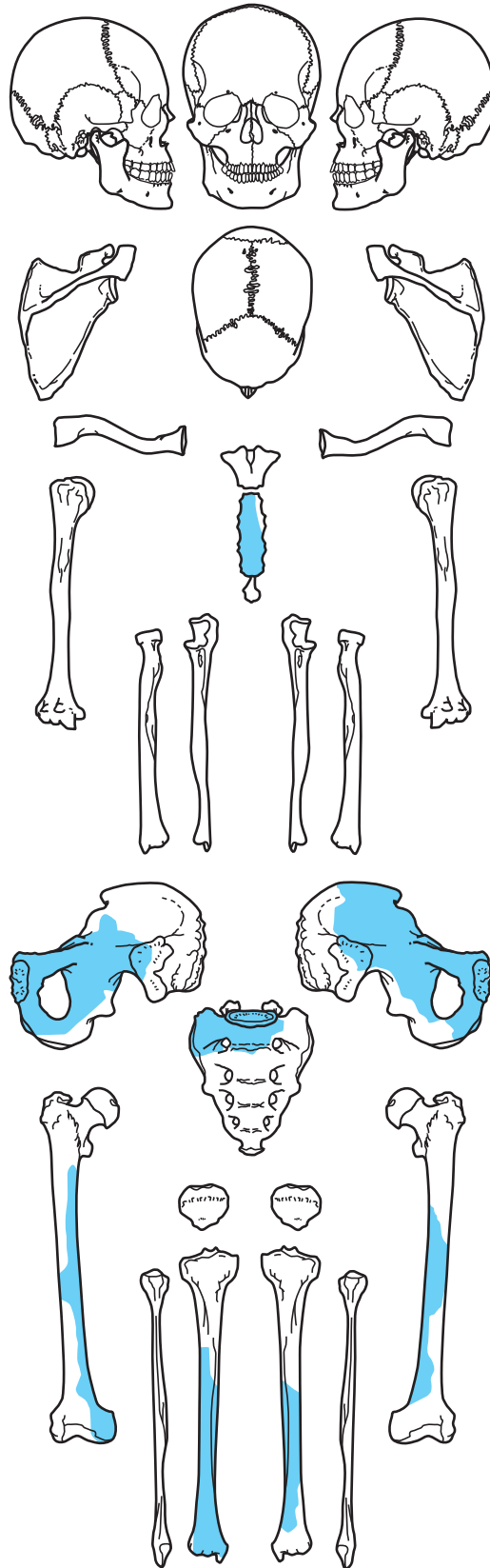
	中山西		鷺の森		門田A		土井ヶ浜		横隈狐塚		金隈		大友	
	弥生～古墳人 広島県 広島市 (松下・他)	SK-1	弥生～古墳人 広島県 竹原市 (松下)	1	弥生～古墳人 広島県 府中市 (松下)	n	M	弥生人 山口県 下関市 (松下)	n	M	弥生人 福岡県 福岡市 (中橋・他)	n	M	
8. 中央最大径	26 (左)		25		27(左)	1	26.42	55	23	26.65	14	25.9	27	27.26
9. 中央横径	17 (左)		19		18(左)	1	19.29	55	23	19.91	14	20.3	29	19.48
10. 骨体周	69 (左)		71		73(左)	1	72.67	55	23	73.65	14	73.1	27	74.74
10b. 最小周	(65) (左)		66		66(左)	1	66.42	53	18	66.17	22	68.1	23	68.17
9/8 中央断面示数	65.38 (左)		76.00		66.67 (左)	1	73.22	55	23	74.81	14	78.4	27	71.79

表 6 大腿骨 (mm) (Femur)

	中山西 SK-1 女性
1. 最大長(右)	—
(左)	—
2. 自然位全長(右)	—
(左)	—
3. 最大軀子長(右)	—
(左)	—
4. 自然位軀子長(右)	—
(左)	—
6. 骨体中央矢状径(右)	—
(左)	23
7. 骨体中央横径(右)	—
(左)	26
8. 骨体中央周(右)	—
(左)	79
9. 骨体上横径(右)	—
(左)	—
10. 骨体上矢状径(右)	—
(左)	—
15. 頸垂直径(右)	—
(左)	—
16. 頸矢状径(右)	—
(左)	—
17. 頸周(右)	—
(左)	—
18. 頭垂直径(右)	—
(左)	—
19. 頭横径(右)	—
(左)	—
20. 頭周(右)	—
(左)	—
21. 上顆幅(右)	—
(左)	—
8/2 長厚示数(右)	—
(左)	—
6/7 骨体中央断面示数(右)	—
(左)	88.46
10/9 上骨体断面示数(右)	—
(左)	—

表 7 脛骨 (mm) (Tibia)

	中山西 SK-1 女性
1. 脛骨全長(右)	—
(左)	—
1a. 脛骨最大長(右)	—
(左)	—
1b. 脛骨長(右)	—
(左)	—
2. 顆距間距離(右)	—
(左)	—
3. 最大上端幅(右)	—
(左)	—
3a. 上内関節面幅(右)	—
(左)	—
3b. 上外関節面幅(右)	—
(左)	—
4a. 上内関節面深(右)	—
(左)	—
4b. 上外関節面深(右)	—
(左)	—
6. 最大下端幅(右)	—
(左)	—
7. 下端矢状径(右)	—
(左)	—
8. 中央最大径(右)	—
(左)	26
8a. 榮養孔位最大径(右)	—
(左)	—
9. 中央横径(右)	—
(左)	17
9a. 榮養孔位横径(右)	—
(左)	—
10. 骨体周(右)	—
(左)	69
10a. 榮養孔位周(右)	—
(左)	—
10b. 最小周(右)	—
(左)	(65)
9/8. 中央断面示数(右)	—
(左)	65.38
9a/8a 榮養孔位断面示数(右)	—
(左)	—
10b/1 長厚示数(右)	—
(左)	—



中山西 SK-1(女性・年齢不明)

図2 人骨の残存図(アミかけ部分)

(Fig.2 Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)

IV まとめ

発掘調査の結果、工事中に発見された石棺のほか、精査中に、その石棺から約 0.9 m 北側の位置に小型の石棺と石蓋土坑を 1 基ずつ確認した。すでに土取りで周囲が削平を受け 3 基の墳墓が所在する範囲しか現地形を留めていなかったため、遺跡の規模（遺跡の範囲）、墳墓の数等は不明と言わざるを得ない。ここでは、各墳墓の概要を記し、若干の考察を加えてまとめとしたい。

SK1 は、発見の契機となった石棺で、土取り作業中に南側半分近くが削平を受けた状態で確認された。蓋石に目貼りが施されていたこともあり、内部にはほとんど土砂が入り込んでおらず、調査前から骨盤等の人骨が確認できた。調査した結果、石棺は、現状で、蓋石が 4 枚、側壁は東側 4 石、西側 3 石、南小口は 1 石からなる構造で、蓋石の目地には小石を詰めたのち、粘土質の土で目貼りをしていることが確認できた。内法は、現状で、約 110 cm、幅約 40 cm、深さ約 27 cm である。人骨は土取りで上半身部を欠損しており、胸骨体、肋骨、腰椎、仙骨、寛骨、大腿骨、脛骨が遺存するのみであった。鑑定によれば、年齢は不明であるが腰椎体には骨棘が形成され、変形性脊椎症が認められることから、それほど若くないとのことである。また、性別は大坐骨切痕の角度が広いこと、下肢骨が細いことから女性とのことである。推定身長は、右大腿骨の最大長（405mm）から、151.62 ～ 151.76 cm とされる。なお、骨の位置関係から埋葬頭位方向は南側である。副葬品等は確認されなかった。

SK2 は、SK1 の約 0.9 m 北に位置する小型の石棺である。蓋石は基本的には 2 枚からなるが、隙間等に小さな板材を数枚重ねて置いていた。側壁、小口とも 1 枚の石材を棺状に組んでいる。内法は長さが約 50 cm、幅は南側で 25 cm、北側で 22 cm、深さ約 22 cm である。内部を精査したが人骨等は遺存していなかった。石棺の大きさから、乳幼児が埋葬されていたと推定される。幅の差や床面の高低差から、埋葬頭位方向は南側と推定される。

SK3 は、SK2 の西側にほぼ平行に造られており、SK2 の墓壙の一部を削っていた。蓋石を 5 石確認し、その下は素掘りの土坑を確認した。床面の形状から木棺構造であった可能性が高いが、木材は朽ちて遺存していなかった。内法は、長さ約 50 cm、幅北側で約 30 cm、南側で約 18 cm、深さは約 20 cm である。内部には人骨等は遺存していなかった。墓壙の大きさから、乳幼児が埋葬されていたと推定される。幅の差などから、埋葬頭位方向は北側と推定される。

成人墓と考えられる SK1 と、乳幼児墓と考えられる SK2、SK3 との関係性について、両者は約 0.9 m 離れているが、長軸方向はほぼ同じであることから、何らかの関係があったことが推測される。可能性として想定されるひとつは親子関係であるが、これを証明する根拠はないのが現状であり、あくまでも想定域をでるものではない。

なお、当遺跡の時期については、時代を推定できる土器などの資料の出土がないことから不明である。しかしながら、当地域における埋葬方法として箱式石棺を採用する事例の多くは弥生時代中期末から古墳時代前半期にかけてのものである^(注)。これまでの広島市域における調査事例の側壁石材の使用方法を詳細に見てみると、明らかに古墳時代と考えられる、安佐南区祇園芳ヶ谷第 3 号古墳第 1 主体（檜垣 1984）、安佐北区倉掛立石古墳第 3 主体（石田 1978）、同口田南道川第 3 号古墳埋葬施設・

道川第 4 号古墳埋葬施設 (石田編 1982), 同口田南中小田第 10 号古墳 SK 1 (高下 2004), 東区温品須賀谷第 1 号古墳 (松崎・潮見 1961), 安芸区中野成岡第 2 号古墳埋葬施設 (荒川 2001) などでは, 5 枚ないし 6 枚の石材を縦長に設置して側壁としているのに対して, 明らかに弥生時代と推定される, 安佐北区可部番谷遺跡 (宮田 1997), 同三入坊主山遺跡 (楳木編 2011), 同白木佐久良遺跡 (阿部編 1984) における箱式石棺は, やや細長の石材を 3 枚程度使用して側壁とする傾向にある。この傾向からすると, 本遺跡 SK 1 は前者の特徴に近いと言え, 当遺跡は古墳時代に所属する可能性が高いことを推測させるものである。

注

広島県においては, 箱式石棺墓の初見は弥生時代中期末であり, 弥生時代後期を中心に県西部で採用される。古墳時代以降になると全域で認められるようになる。

加藤光臣 1987 「芸備地方における弥生墓制の動態 (上)」『芸備地方史研究』第 162 号 芸備地方史研究会

梅本健治 1999 「墳墓から見た地域性」『研究輯録』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター

参考文献

阿部滋編 1984 『佐久良遺跡発掘調査報告』広島市教育委員会

荒川正己 2001 『成岡 A 地点遺跡』財団法人広島市文化財団

石田彰紀 1978 『立石古墳発掘調査報告』立石古墳発掘調査団

石田彰紀編 1982 『高陽台遺跡群発掘調査報告』広島市教育委員会

楳木敬太編 2011 『トンガ坊城遺跡・坊主山遺跡・柳遺跡・琴平遺跡』財団法人広島市未来都市創造財団

高下洋一 2004 『史跡中小田古墳群遺構状況確認調査報告』財団法人広島市文化財団

檜垣栄次 1984 「芳ヶ谷遺跡」『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』広島市教育委員会

松崎寿和・潮見浩 1961 「先史時代の広島地方」『新修広島市史』第 1 巻総説編 広島市役所

宮田浩二 1997 『番谷遺跡発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団

圖 版

図版 1



a 中山西遺跡遠景（北西から）



b 中山西遺跡近景（南から）



a 工事中に露出した箱式石棺（SK1）（南から）



b 箱式石棺（SK1）内の人骨出土状況（南から）

図版 3



a SK1～ 3 検出状況（西から）



b SK1～ 3 検出状況（北から）



a SK1 蓋石検出状況（西から）



b SK1 蓋石上粘土除去後（西から）

図版 5



a SK1 蓋石除去後の棺内（北から）



b SK1 人骨検出状況（北から）



c SK1 人骨検出状況（西から）



a SK1 棺内完掘状況（北から）



b SK1 人骨取上げ風景（北西から）



c SK1 完掘状況（北から）

図版 7



a SK2 蓋石検出状況（西から）



b SK2 蓋石（中段）検出状況（西から）



a SK2 棺内完掘状況（西から）



b SK2 石棺南側小口（北東から）

図版 9



a SK2・SK3 蓋石検出状況（西から）



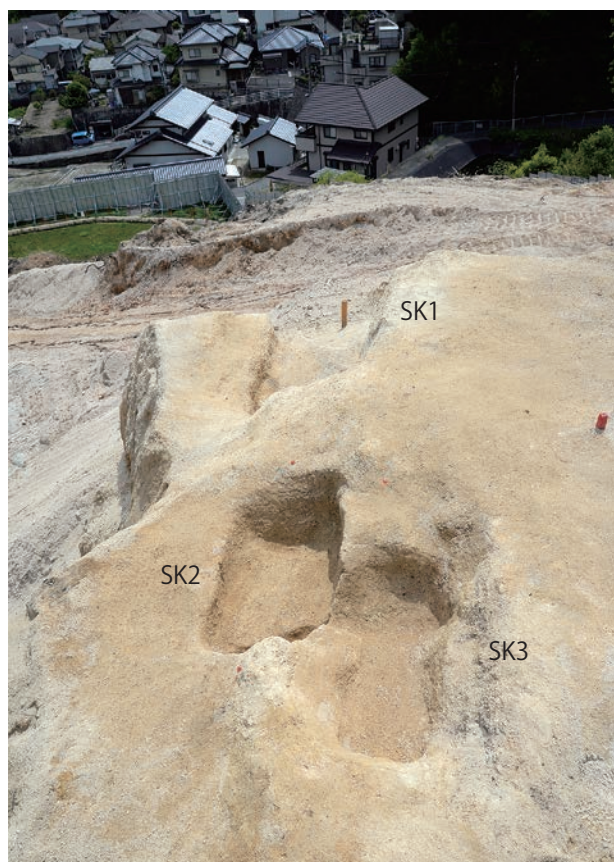
b SK3 墓壇検出状況（西から）



a SK3 土層断面（北西から）



b SK3 完掘状況（北から）



c SK1~3 完掘状況（北から）



四肢骨 (The limb bones)

中山西 SK-1 (女性・年齢不明)
(The skeleton SK-1 from the Nakayama-nishi site, female unknown age)



变形性脊椎症 (spondylosis deformans)

報告書抄録

ふりがな	なかやまにしいせき　－ひろしましひがしくなかやまにし2ちょうめしよざい－							
書　名	中山西遺跡　－広島市東区中山西二丁目所在－							
副　書　名								
シリーズ名	公益財団法人広島市文化財団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第4集							
編著者名	牛黄蓍豊　高下洋一　濱岡大輔　松下孝幸　松下真実							
編集機関	公益財団法人広島市文化財団　文化科学部　文化財課							
所　在　地	〒 732-0052　広島県広島市東区光町二丁目 15 番 36 号							
編集機関	特定非営利活動法人広島文化財センター							
所在地	〒 732-0052　広島県広島市東区光町二丁目 9 番 22 － 601 号							
発行年月日	西暦 2017 年 2 月 1 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村　遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
なかやまにしいせき 中山西遺跡	ひろしまけん 広島県 ひろしまし　ひがしく 広島市東区 なかやまにし 中山西 2ちょうめ 二丁目	34102	—	34° 24′ 32.5″	132° 29′ 32″	20160419 ～ 20160425	35 m ²	広島高速5号線 建設事業に伴う 埋蔵文化財発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特　記　事　項	
中山西遺跡	墓	弥生時代後 期～古墳時 代前期	墓3基（箱式石棺墓2， 石蓋土壙墓1）		人骨		箱式石棺墓S K 1から人 骨出土	
要約								
高速道路工事中に人骨が入った箱式石棺墓が発見され、急遽発掘調査を実施した。工事中発見された箱式石棺墓の他に小型の箱式石棺墓と石蓋土壙墓を検出した。箱式石棺墓内から見つかった人骨は身長約150cmの若くない女性と判明。墓からは遺物は出土しなかったが、他の事例により弥生時代後期から古墳時代前期にかけての墓と考えられる。								

(公財) 広島市文化財団発掘調査報告書 第4集

中山西遺跡

—広島市東区中山西二丁目所在—

2017年2月

編集発行	公益財団法人広島市文化財団 文化科学部 文化財課 〒732-0052 広島市東区光町二丁目15番36号 TEL 082-568-6511
編集機関	特定非営利活動法人広島文化財センター 〒732-0052 広島市東区光町二丁目9番22-601号 TEL 082-299-7413
印刷	大村印刷株式会社広島営業所 〒730-0851 広島市中区榎町2番15号 TEL 082-503-1221